



【歴史(戦略)に学ぶ企業経営】

二宮金次郎が遺した 経営者へのメッセージ

その
巻

- 今月号(その巻)
1. 少年期の金次郎
 2. 積小為大
 3. 心田開発(意識改革)
- 次月号(その巻)
4. 金次郎の仕法
 5. 分度と経営計画
 6. 推譲と企業の使命

1 少年期の金次郎

農民出身でありながら勉学に励み、功績を残した江戸時代後期の偉人として小学校等で銅像として見かける二宮金次郎。勤勉・勤労のイメージが強い金次郎ではあるが、その功績を知っている人は少ないのではないだろうか。

金次郎が十四歳のとき、母と二人の弟を残して父が他界する。二宮家は数年前に起こった大洪水の影響を受け家計を窮しており、父を葬るために所有地を売った。悲観に暮れた母は病の床

につき、父を追うように二年後に亡くなった。そのような状況で二人の弟を母の実家に託し、金次郎は伯父のもとで二宮家の再興を願い勤労と勤勉に勤しんだ。

2 積小為大

寸暇を惜しんで勉強をしていた金次郎は夜の明かりを確保するために酒匂川の堤防の下を耕し自分で菜種の種を蒔いて育てた。これが実ると収穫し油屋へ売りに行き灯油と交換してもらっていた。

「大事をなそうと欲すれば、

小さな事を怠らずに勤めよ。小

が積もって大となるものだからだ。およそ小人の常で、大きな事を欲して、小さな事を怠り、できがたい事を心配して、できやすい事を勤めない。それで、結局は大きな事ができないのだ。(後略)」

これは、少年期の金次郎が経験してきた「積小為大」を教えている。この少年期の勤勉・勤労が報われ、二十歳の時には廃屋となった自家を修理し、質入した田を買戻して二宮家を再興することができた。

3 心田開発(意識改革)

その後金次郎は、小田原藩家老・服部家の家政再建を任せられそれを契機に藩主大久保忠真に見出され、分家宇津家の下野国桜町領の再建を成功させた。

自費を投じて財政再建や組織改革を成功させた金次郎は、現在でいう倒産寸前の会社を立て直す再建コンサルタントのよう

な存在だった。

次月号でその仕法(方式)を説明するが、金次郎が生涯の仕事とした心田開発(意識改革)とはどのようなものだったのか。

「私の生涯の仕事は、すべての荒地を開くことを勤めとした。そして、荒地には数種類ある。

田畑の荒れたのがあるが、これは国家の荒地だ。(中略)また土地が悪くて、年貢や村入用だけの収穫で、作益のない田畑もある。(中略)また、身体が強健でいながら怠けて日を送る者がある。(中略)資産もあり金力もありながら国家のためになることをせず、いたずらに奢りにふけて財産を費やす者がある。これは世間の大きな荒地である。(中略)これら数種の荒地は、そのもとは心が荒れているところから出るものだから、私の道は、まず心田の荒地を開くのを先とする。心田の荒地を開いたのちは、田畑の荒地に及んで、この数種の荒地を開いてよい田畑とすれば、国が富強になるのは、

手のひらを返すようにたやすいことだ。」

荒れた田畑を開いても、それを耕す農民の心が荒れていれば田畑は荒地に戻ってしまう。農民の心を開いても役人が荒れていけば農民の心はまた荒地に戻ってしまう。金次郎が生涯の仕事としてすべての荒地を開く(心田開発)と言ったのは、役人など大きな組織の荒地に対して金次郎一人の力は小さいが勤めていくことで必ず変わる(積小為大)と信じていたのではないだろうか。

企業の経営改善、維持発展のために金次郎の心田開発の教えは重要である。

〈つづく〉

歴史は、今を経営する者がよい良い事業を展開するために、先人が遺してくれた経営の鑑(かたみ)でもあります。

* 史実は諸説があります。本文とは異なる説もありますのでご了承ください。

* イラストはイメージです。

参考文献

児玉幸次『二宮尊徳』一宮監修 夜間中公クラシックス
重門冬二『二宮尊徳の経営学』PHP文庫

中小企業診断士 馬淵智幸氏

●プロフィール(マブチトモユキ)
中小企業診断士
MBA(経営学修士)
「税理士法人NEXT」勤務
事業承継ブロックコーディネーター
中部東海第1号認定支援機関として
経営改善支援等を行いながら、販路
開拓や事業承継など中小企業のあらゆる問題解決に注力している。

